

公益事業レポート 2011

創立120周年記念シンポジウム

「アルツハイマー型認知症の治療・予防戦略
— 研究・治療・ケアの最前線から」



「すべての人びとのいのちと環境のために」



遠山椿吉記念 第2回
健康予防医療賞 授賞



すべての人びとのいのちと環境のために

財団法人東京顕微鏡院と、これをルーツとする医療法人社団こころとからだの元氣プラザは、平成23年4月1日に、創立120周年を迎えました。

節目の年にあたり、実は、平成23年4月6日に800名をご招待する記念式典・祝賀会を、また10月1日に顧客約400社をご招待するレセプションを予定しておりましたが、3月11日に発生した東日本大震災の深い悲しみの中で中止とさせていただきます。同時に、両法人は、被災地の医療支援に資金援助を行い、放射能漏洩問題に研究助成を行い、また新たな設備投資を行って同年8月1日より食品、水および土壌などの放射性物質検査を実施しております。「すべての人びとのいのちと環境のために」をモットーに活動する両法人にとって、記念すべき120周年と、未曾有の規模で東日本大震災・放射能漏洩事故が同時に起こったことに、歴史の巡り合わせというものを感じ、誠に身の引き締まる思いです。

120周年事業

本年度は、120周年記念シンポジウム「アルツハイマー型認知症の治療・予防戦略—研究・治療・ケアの最前線から」（平成23年10月1日（土）日経ホール）と、その講演録の出版を、記念事業のひとつとして実施いたしました。

120年前は、わが国が近代国家へと歩み始めた頃で、伝染病が最大の脅威とされた時代です。今やわが国は、世界に先駆けて超高齢社会を実現したわけですが、かつて不治の病といわれたアルツハイ

マー型認知症について、その早期発見や治療法、治療薬の開発、予防の可能性、ケアに関する研究の最新事情を、高齢期を明るく生きるヒントとしてお役立ていただくことを目指し、たいへん多くの方にご好評をいただくことができました。

私は経営者として実業界の第一線で長年活動してきておりますが、同時に、在家の禅の指導者としても活動を続けてきております。私が人生をかけたこれらの諸活動を通して追求してきたものは、結局のところ、2つのキーワードに集約されます。

その一つは「こころとからだは一つのもの」ということです。

もう一つは、「こころとからだとその周囲の環境はひとつのもの」ということです。「こころとからだ」という人間の存在は、その周囲の環境、つまり家族、社会、国、地球、宇宙とは切り離すことができない、ということなのです。

認知症が、難しい病気とされるのは、精神に関わる問題だからといわれます。この「こころとからだ」の一体性、「人間と環境」の一体性という2つのキーワードを頭の片隅においていただいで、多くの方に、この講演録をお読みいただきたいと思っております。

また、平成24年3月、ホームページ上に「遠山椿吉記念館」を立ち上げ、遠山椿吉の活動を通して、近代日本の医学・衛生学の歴史の一片をご紹介しますこととしました。

明治24年3月28日発行の医学雑誌「東京医事新誌」によれば、事業発足にあたり、内務省衛生局初代

衛生局長として近代日本の衛生行政の基礎を築いた長与専齋、陸軍軍医総監の石黒忠憲、海軍軍医総監で成医会(のちの東京慈恵会医科大学)を創設した高木兼寛など10名の賛同者がその活動を支えたと記されています。当法人は、公衆衛生向上を図り社会に貢献したいという遠山椿吉博士の非常に強い意志で創業し、自立した経営基盤を築き、昭和2年に財団法人の認可を受けて今日に至っております。

一般財団法人への移行と私たちの公益事業

さて、新公益法人制度において、財団法人東京顕微鏡院は、平成25年度より、一般財団法人へ移行することを機関決定し、現在その手続きを進めています。折しも、日本橋研究所は施設拡充のため、新築の豊海センタービルに移転し、平成24年5月1日より豊海研究所で営業を開始することとなりました。

一般財団法人へ移行すれば、公益法人ではありませんが、新制度では、移行時点の純資産相当額を「公益目的支出計画」を立ててゼロになるまで毎年消費し、行政庁に報告する義務が生じますので、移行後も今までと同様、公益事業の運営を継続することとなります。

また、私たちは、両法人一体経営により、「食と環境の安全・安心確保による健康危害の未然防止」および、「こころとからだの健康づくり」と「予防医療」を二大事業として推進し、極めて公益性の高い事業をこれまで長い間行ってきております。一般財団法人に移行しても、その心は不変で、「収益を上げて、その

収益でさらに公益的な事業を展開していく」という、このビジネスモデルが、本当の意味の公益事業を展開するうえで必要ではないか、と考えております。

健康ないのちのために

120年前、創業時に遠山椿吉博士が追求したいと願った「健康ないのち」「健全な環境」は、120年たった現在、地球的規模で、ますますその重要度を増していると思われまます。人類の未来において、「いのちと環境」は、その根幹を成すものである、ということをお忘れてはなりません。

私は、健康な体、健康な心、健全な環境と健康ないのちの一つのものだと思っています。創業120年たった現在、両法人が未来に向かって、健康ないのちということをおさらに追及し、維持し、発展させるのが私たちの使命であります。

平成24年 5月

財団法人東京顕微鏡院 理事長

医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 理事長



山田 匡通

震災支援

2011(平成23)年3月11日。未曾有の規模で東日本大震災が発生し、福島第一原子力発電所で世界最大規模の放射能漏洩事故が起こり、現在も周辺環境から放射性物質が検出される状況が続いています。「すべての人びとのいのちと環境のために」を理念に掲げる当財団・医療法人は、被災地の医療支援、ヒトの内部被曝に対する研究助成を行いました。

■資金援助：被災地の医療支援

自治医大医学部同窓会東日本大震災支援プロジェクト(本部長：尾身茂 自治医科大学教授、名誉世界保健機関(WHO)西太平洋事務局長)の趣旨に賛同し、被災地の皆様の医療支援に少しでもお役にたてていただくため、両法人連名で、3月31日に500万円の資金援助を行い、初期活動を支援しました。

6月3日には、元氣プラザより医療資材(消毒薬320本、マスク2万5千枚)の追加支援も行いました。

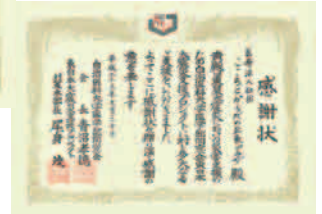


自治医大医学部同窓会東日本大震災支援プロジェクト 被災地より第一陣帰還(自治医大グラウンド)

本支援プロジェクトは、3月20日から9月30日までの6か月間、毎週交代で、医師チーム(のべ117名)、臨床心理士チーム(のべ75名)が岩手県立釜石病院と宮城県登米・南三陸地区の診療支援を継続したもので、地域医療の自立を助けた点が、社会的に評価されました。尾身茂氏とは、これからの医療の在り方などについて当財団・元氣プラザが話を伺った経緯もあり、この支援が実現したものです。



自治医大医学部同窓会
東日本大震災支援プロジェクトより
財団・医療法人へ感謝状



■研究助成：ヒトの内部被曝を評価

周辺環境から放射能が検出され、飲料水や食品によるヒトの内部被曝に関する不安が高まるなか、当財団は、「福島原発事故による大気中漏洩放射性物質に対するヒト曝露評価モデルの開発*」(代表研究者：小泉昭夫 京都大学大学院教授)に、研究費総額465万円のうち270万円を助成し、7月2~8日現地入りする小泉教授ら一行の調査活動をいち早く支援しました。

*京都大学防災研究所 東日本大震災特別緊急共同研究



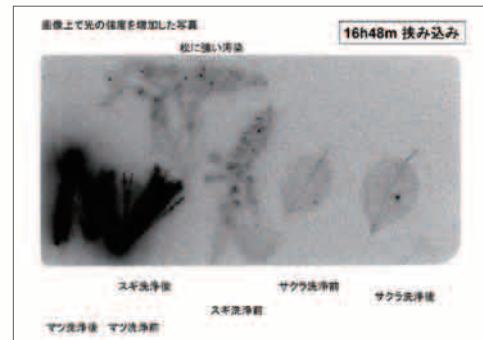
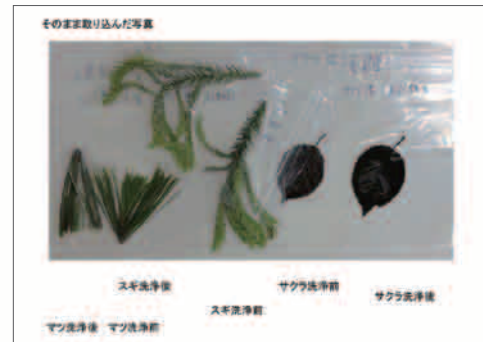
小泉教授一行、福島へ出発

本研究では、成人5名が現地で食品と飲料55日分を購入して検査試料とし(「陰膳方式」)、ゲルマニウム半導体検出器を使用して20,000秒の測定(検出限界は0.2ベクレル/キログラム)を実施した結果、年間の体への影響は、セシウム134と137合わせて最大で0.083ミリシーベルト/年で、基準値(年間1ミリシーベルト)以下であることが判明しました。

7月の現地調査で里山の樹木の放射性物質汚染に着目した小泉教授は、9月16~20日福島で再調査し、葉脈に取り込まれて洗浄では落ちないセシウム137を検出し、論文執筆を進めています。



大量のサンプルを採取



里山の松葉に洗浄後も強い汚染が見られた

研究成果：論文「福島県成人住民の放射性セシウムへの経口、吸入曝露の先行評価」平成23年10月23日、日本衛生学会英文誌「Environmental Health and Preventive Medicine」に採択され、11月15日朝日新聞、京都新聞、毎日新聞、日経新聞 Website、KBS 京都 Website、12月15日NHKで報じられました。平成24年6月1日、当財団主催の第81回食と環境のセミナーにて食品管理者等に向けた講演を予定しています。

◇小泉昭夫教授は、遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞特別賞の受賞者です。

創立120周年 記念事業

2011(平成23)年4月1日、東京顕微鏡院と、これをルーツとする医療法人社団こころとからだの元氣プラザは創立120周年を迎えました。記念シンポジウムでは、超高齢社会において誰でもかかりうる病気「アルツハイマー型認知症」をテーマに、研究・治療・ケア・予防の最前線から、サイエンスに基づいた最新情報を各分野の専門家からお話いただきました。また、創業者遠山椿吉の業績を通して、近代日本の医学・衛生学の歴史の一片を紹介するサイト「遠山椿吉記念館」を開設しました。

■120周年記念シンポジウム

「アルツハイマー型認知症の治療・予防戦略 —研究・治療・ケアの最前線から—

◎日時:平成23年10月1日(土) 11:00~17:30 ◎会場:日経ホール ◎参加者数:474名

◎後援:厚生労働省、東京都、日本認知症学会、日本認知症ケア学会、日本老年精神医学会、日本老年看護学会、日本老年社会科学会、日本老年医学会、認知症の人と家族の会



世界に先駆けて超高齢社会を迎えた日本の現状を鑑み、創立120周年にふさわしいシンポジウムのテーマとして、加齢を最大の危険因子とする病、認知症、なかでも最も多いとされるアルツハイマー型認知症を選定し、開催しました。

かつて不治の病と言われたアルツハイマー型認知症ですが、その研究は、近年急速に進歩しています。本シンポジウムは、各分野の第一人者を講師に迎え、松下正明先生の司会で最新事情をご紹介いただきました。

基調講演に続き、参加者から寄せられた質問について、討論形式による、各講師の意見交換も行いました。参加者からは、「難解な最新情報のわかり易い説明は、ここでしか聞けないものだった」「講演で

得た知識を自分の業務にも生かしていきたい」などの声が聞かれました。アルツハイマー型認知症を自分自身の問題として考える方や、業務として患者さん達を支える方々に、最新の知識を啓発する有意義な機会を提供することができました。

■120周年記念シンポジウム講演録

たいへん多くの方々にご好評をいただいた創立120周年記念シンポジウム「アルツハイマー型認知症の治療・予防戦略—研究・治療・ケアの最前線から」は、社会公益に資するため、講演録として出版いたしました。120周年を記念して、特別養護老人ホーム、介護関係のNPO法人ほか、関係機関に謹呈しました。

◆プログラム

◇司会・オープニングトーク

松下 正明 東京都健康長寿医療センター理事長、
東京大学名誉教授

◇基調講演

「アルツハイマー型認知症の早期発見と治療」

遠藤 英俊 国立長寿医療研究センター
内科総合診療部長

「アルツハイマー型認知症

—病院探求から根本治療へ—

岩坪 威 東京大学大学院医学系研究科
神経病理学分野 教授

「アルツハイマー型認知症根本治療薬開発の 可能性を探る—創薬の現場から—

杉本 八郎 京都大学大学院薬学研究科 客員教授

「アルツハイマー型認知症のケア

—病者の尊厳を守る—

諏訪さゆり 千葉大学大学院看護学研究科
訪問看護学教育研究分野 教授

代読・辻村真由子

千葉大学大学院看護学研究科
訪問看護学教育研究分野 講師

「アルツハイマー型認知症

—病院探求から根本治療へ—

朝田 隆 筑波大学臨床医学系精神医学 教授

◇総合討論

司会: 松下正明 回答者: 遠藤英俊、
岩坪威、杉本八郎、辻村真由子、朝田隆

(講演順)

当日ご参加いただけなかった方にも



ご一読いただき、アルツハイマー型認知症への理解ならびに、病者支援の一助となり、高齢期を明るく生きる活力となることを願っております。

新刊 発行日:平成24年3月 サイズなど:B5版 103
ページ 発行部数:2,000部 頒価:2,000円

※当財団のホームページでご購入いただけます
(TOP>公益事業>出版物)



■遠山椿吉記念館サイト **新設**

「遠山椿吉記念館」は、創立120周年を記念して当財団ホームページ内に開設したサイトです。明治時代の細菌学者で、当財団創業者の遠山椿吉を通して、近代日本の医学・衛生学の一片をご紹介します。

開館を記念して、120年前の東京顕微鏡院誕生の報道記事、当時衛生上の大きな問題であった感染症

(特に結核)への対策についてや、明治・大正期の水道水質と衛生事情、上水協議会の状況、遠山椿吉の業績、東京顕微鏡院の事業の紹介などを掲載しています。ホームページという特性を活かし、今後も内容を拡充させていく予定です。

◇基礎資料:東京顕微鏡学会の学会誌である「顕微鏡」、「東京顕微鏡学会雑誌」発行:明治27年7月より昭和19年4月までの50年間
※当財団、当医療法人のホームページ(TOPページ)よりご入館いただけます URL:<http://www.kenko-kenbi.or.jp/kinenkan/>

学術振興 (遠山椿吉賞)

すべての人びとのいのちと環境のために

2008(平成20)年度、当財団創業者、医学博士遠山椿吉の生誕150年、没後80年を記念して創設した、公衆衛生と予防医療の分野における研究者を対象とした顕彰制度です。「遠山椿吉記念 食と環境の科学賞」と「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」を設け、隔年で選考顕彰します。授賞式では、賞状、記念品、副賞100万円を授与し、記念講演およびレセプションを開催しています。



遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞

平成23年度は、将来の予防医療のテーマに先見的に着手したものを重点課題としました。「近い将来の健康診査の方法論を変えるようなもの」「健康診査の受診の機会を高め、医療経済面での効果がみられ、健康診査の精度向上に資するもの」「超高齢化社会構造における予防医療に関するもの」、「こころの健康づくりおよび、これに関する科学者によるスピリチュアル分野における研究」「性差医療に関するもの」などを想定し、幅広い分野からの応募を呼びかけました。

本賞は、地道に社会への貢献を追及する研究者を顕彰する賞と位置づけています。

遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞



白木 正孝 (しらき まさたか)

成人病診療研究所 所長

「骨粗鬆症診療体制の確立にむけての
臨床疫学コホートの構築(Nagano Cohort研究)」
副賞 100万円

遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞 特別記念賞



久山町研究グループ

代表: 清原 裕 (きよはら ゆたか)

九州大学大学院医学研究院環境医学分野 教授

「生活習慣病の時代的変遷および
その現状と課題に関する疫学調査(久山町研究)」
副賞 100万円

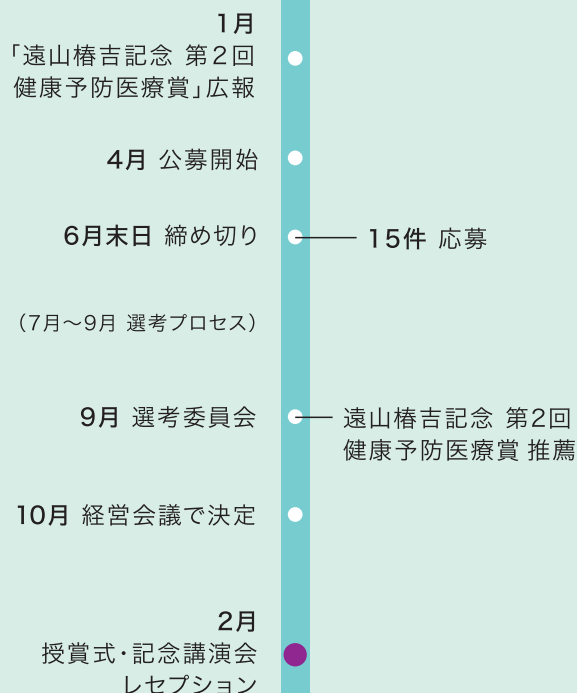
選考の過程



2011(平成23)年1月から学会・関連媒体等を通して募集告知をはじめ、6月末日には15件のご応募をいただきました。

選考プロセスは、一次審査・選考委員会という2つのステップで進めました。一次審査では、15件すべての応募論文を、各選考委員に個別に目を通していただくこととし、4つの評価軸(①公衆衛生への貢献度、②公衆衛生向上を図る創造性、③予防医療の実践、④これからの人の育成)で五段階評価を付けていただきました。集計した評価票は各委員に事前に読んでいただき、選考委員会では本賞の趣旨と今年度の重点課題を確認し、十分に討議を重ねて受賞候補者の選出に至りました。

この選考委員会の結論を踏まえ、当財団・医療法人合同の経営会議で、お二方の授賞が決定しました。なお、久山町研究グループに贈呈する「特別記念賞」は、久山町研究50年と当財団・医療法人120周年を記念して特設したものです。





創業者 遠山 椿吉 (とおやま ちんきち)

1857(安政4)年山形県生まれ。東京大学医学部において別課医学を修めた後、山形県医学校長心得などを歴任。1888(明治21)年東京医科大学撰科に入学し、衛生学および微生物学を研究。1890(明治23)年1月、帝国医科大学国家医学科に入学、同年4月卒業証書を授与される。1891(明治24)年、東京顕微鏡院の前身である東京顕微鏡検査所を創立。かたわら東京慈恵医院医学校(東京慈恵会医科大学の前身)講師、東京市衛生試験所長などの職を兼ねる。特筆すべき業績は、東京顕微鏡学会の創立、ペスト菌の研究、脚気の治療方法の研究、東京の水質管理を担い、水道の衛生管理に尽力、また保健部を新設し、予防医療を展開するなど多岐にわたる。機関紙『顕微鏡』『東京顕微鏡学会雑誌』を主宰し、医事衛生に関する数多くの著書や短歌を残し、華道、庭園学などについても著述している。亡くなる1年前にそれまでの人生を振り返り、思想哲学をまとめ「人生の意義と道徳の淵源」を上梓した。1927(昭和2)年、東京顕微鏡院を財団法人とし、初代院長に就任。1928(昭和3)年10月1日遠逝。享年71歳

2月7日 遠山椿吉賞授賞式

「遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞」の授賞式・記念講演会・レセプションは、2011(平成23)年2月7日(火)にホテルメトロポリタン エドモント(東京・飯田橋)にて開催されました。授賞式には、選考委員の先生方を始め、研究者、報道関係者ほか当法人関係者など、およそ130名が祝福に集まりました。

山田匡通理事長は、白木先生のご研究について「今までなかった研究分野において、患者集団を大規模なコホートに構成し、業績を残された。しかもご自分の病院を経営しながら個人で約20年追究してこられた点は、遠山椿吉博士の精神をまさに実行してこられたと考えます」と述べ、久山町グループのご研究については、「久山町という町全体がいわば九州大学医学部と一緒に50年間続けてきた世界的に類を見ない研究」と深い敬意を表し、「今回、表彰いたしました二つの研究は、当財団創立120周年記念の年にふさわしい研究であったと思います。お二人の先生方のますますのご活躍、ここにいらっしゃる皆さまのご健勝を祈念いたしまして、私のごあいさつとさせていただきます」と結びました。

平成24年度は、「遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞」を選考顕彰いたします。

* * * * *

*平成23年度「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」授賞式について詳細は、当財団ホームページをご覧ください。 ●撮影協力: 栗山 実

遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞 授賞式



山田匡通理事長より白木正孝氏に遠山椿吉賞を授与

遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞



久山町研究グループ代表 清原 裕氏に 遠山椿吉賞特別記念賞を授与



受賞記念講演: 白木正孝氏



受賞記念講演: 清原裕氏

■ 受賞者あいさつ

白木 正孝氏 約20年前であります。開業しておりました父がなくなり、郷里でそのあとを継ぐことになりました。曲がりなりにも東京都の病院で専門外来を担ってまいりましたので、漠然とその専門性を生かした開業ができればいいなと考えて開業医の生活を開始いたしました。始めてみるとそのように甘い考えは見事に打ち砕かれました。

最も困りましたことは、当方に患者さんの不安に応えられるような文献がなく、今後の見通しが全く見えないということでありました。(中略) そんな時にデスモンド・トンプソン先生が講演され、EBMの概念を懇切丁寧に教えてくださいました。この時から患者さんへの回答に確証を与えてくれるEvidenceは自らの問題意識のもとに作って行かねばならないと思い定めました。そうはいいまして個人で収集できるEvidenceの量は限定的であります。そこで約10年前からその萌芽が見え始めました医師主導型研究の組織の運営を始めました。

始めてみて驚きましたことは、全国の約600有余のご開業の先生から現在までに5000例に近い患者様の治療データがいただけたことであり、このEvidenceの収集は未だに継続しているということでもあります。このような作業を通じて、共にEvidenceを構築する友人がもてたこと、そのことによりたった一人の開業医ではないと実感できること、これこそが私の行動の最大のモチベーションであると思っております。

久山町研究グループ 代表: 清原 裕氏

久山町研究は、1961年に福岡県久山町の地域住民における脳卒中の実態調査として始まりました。その後50年にわたり研究を継続する中で、研究対象疾患は脳卒中から虚血性心疾患、悪性腫瘍、認知症、慢性腎臓病、高血圧、糖尿病など生活習慣病全体に広がりました。そして2002年からわが国で初めて生活習慣病のゲノム疫学研究を立ち上げ、軌道に乗せています。この研究の最大の特徴は、不幸にして亡くなられた住民の方々を病理解剖させていただき、死因およびさまざまな疾病の有無を正確に診断していることです。この他に類を見ない研究方法が、久山町研究を精度の高い疫学研究たらしめていると思います。

この研究は50年の間に、いくつかの医学的成果を挙げてきました。久山町研究の時代の異なる集団を追跡した成果を比較し、脳卒中をはじめとする心血管病や悪性腫瘍の時代的变化とその要因を明らかにしてきました。また近年、肥満、糖尿病、脂質異常症、メタボリックシンドロームなどの代謝性疾患が心血管病の危険因子として台頭していること、そして特に糖尿病が悪性腫瘍、認知症の原因にもなっていることを報告してきました。そしてゲノム疫学研究において、脳梗塞、潰瘍性大腸炎、加齢黄斑変性症などの発症に関わる疾患感受性遺伝子を発見してきました。(中略)

今後もわが国の生活習慣病の実態解明と予防に向けて、微力ではありますが研究室一同力を合わせて努力して参りたいと存じます。今後ともご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

◆ 選考委員長講評



折茂 肇

健康科学大学前学長
当医療法人学術顧問

白木正孝先生のご研究は、開業医による骨粗鬆症のご研究です。委員会では、この研究には独創性があり、長野コホートにおける骨粗鬆症のリスクファクターの解析、各種治療薬の開発、医師主導型の臨床研究による骨粗鬆症併用療法の有用性を証明したなど、先見的に着手してこられた研究成果が、現代の予防医療に生かされている点に高い評価が集まりました。

最も評価された点は、白木先生が開業医として患者に寄り添い、外来診療や往診に多忙な日々を送りつつ、開業医仲間に声をかけて臨床研究を進め、事務局をも務めて研究実績を挙げた点や、東大グループと共同で骨粗鬆症に関連する遺伝子の解析などを行なった点であります。安曇野で開業しながらも研究を重ねて多数の論文発表を行い、優れた研究実績をあげて臨床現場に生かしておられるということから、選考委員会は、このたびの受賞に最もふさわしいという、一致した意見となりました。

久山町研究グループの50年にわたるご研究は、これまでどうして受賞歴がないか、疑問の声が上がるほど、わが国のみならず国際的にも、その重要な功績がよく知られた疫学研究であります。委員会では、疾患コホート研究がなかった時代に、住民の生活習慣病健診を重ねて死後は剖検で死因を確認

するという、他に類を見ない臨床疫学研究を50年間も継続したのみならず、常に新しいご研究にチャレンジし続けていることが高く評価されました。特に、最近の10年間のご業績は、非常に優れたものであると世界的に多大な評価を受けています。

遠山椿吉賞は、本賞一名を顕彰することになっておりますが、久山町研究は、今回の一次審査で最高得点を獲得していること、久山町研究として受賞歴のないこと、50年間継続した非常に貢献度の高い研究で公衆衛生の向上に、地道に貢献してこられたことに深い敬意を表し、特別賞を設けて顕彰すべきであるという結論に達しました。また、特別賞の額を本賞と同額とすることを選考委員会の総意として希望したところ、今回、主催者のご英断により、久山町研究50周年と主催者である財団法人東京顕微鏡院の120周年を記念して「特別記念賞」を設け、特別記念賞及び副賞百万円を、久山町研究グループを代表して清原裕先生にお贈りすることとなりました。

選考委員長として、選考の過程を振り返りますと、この遠山椿吉賞の存在と意義を強く感じる次第であります。このような賞はこれまでなかったのではないのでしょうか。

公衆衛生や予防医療を向上するには、個人個人の先見的な発想力や社会的使命に基づく地道な研究が必要ですが、この分野に於いてはその重要性にも拘わらず、研究者個人に光があたるのが少ないのが現状ではないかと思います。この遠山椿吉賞が、今後とも多くの優れた研究者の業績に光をあて、その業績を公に称えることで、次世代を担う後進の育成にもつながることを期待する次第であります。

◆ 来賓祝辞



福永 仁夫

川崎医科大学 学長

白木正孝先生、そして久山町研究グループ代表の清原裕先生、本日の受賞、誠にありがとうございます。私が祝辞を申し上げますのは、白木先生とほぼ同世代でありまして、先生が東京都老人医療センター、前身の養育院の内分泌の研究グループにおられたところから、約40年近く先生の研究内容を承知しているためと思います。そして、清原先生の久山町グループの研究は、私は内科医ではありませんが、非常に立派な研究をされていることを承知しております。

そして本日のお二人は、それぞれコホートは違いますが、白木先生は長野県患者集団、そして清原先生の研究グループは久山町の地域住民を対象として、それぞれ長年にわたり研究を継続され、緻密な解析、そして、それを臨床に生かす試みをされています。現代の医学・医療の研究は、絶えず分化と融合あるいは統合を繰り返しています。さらに基礎医学はその成果を臨床医学に還元します。また、臨床疫学の成果も患者さんに還元されます。お二人の先生方の研究はこれら3つの過程を具現化し、まさに国民の健康の維持に

役立つものと思っております。そして、先生方お二人の今回の研究により、わが国の臨床疫学のレベルが世界的な水準にあることを確認しました。

白木先生は、多忙な臨床医あるいは開業医としての日常の診療の傍ら、診療が終わってから患者さんのデータを自ら入力されています。そしてそれらを生かすために多くの方々や企業との共同研究をされ、立派な論文を多数発表されています。白木先生の敬服すべきところは、1人の患者さんを診て全体のことを考え、逆に臨床疫学のデータを患者さんの診療に応用されているところでもあります。また、清原先生は、長年の厳密な観察により、国民病とも言われる生活習慣病の病因を探求されています。

お二人の先生方には、疫学研究を通じて、今後ともわれわれの指導に当たっていただきたいと願います。

最後に、この素晴らしい遠山賞に関しまして、本日の資料のなかに遠山先生の業績が記載されています。特に水質検査をなさったということは、公衆衛生学の基礎であります。その時代に栄養状態を改善しようとされたこと、そして予防のために健診を行われたことなど、先駆的な取り組みをなさっておられたことは驚異的です。どうぞ、この遠山先生の記念の賞を末長く続けていただければと念じます。以上、お祝いの言葉に代えます。

学術振興

学会への助成活動、医師や職員による研究発表

東京顕微鏡院は、1989(平成元)年4月以降22年間にわたり「日本食品微生物学会」に事務局機能を提供し、2011(平成23)年より日本カンピロバクター研究会の事務局を務めるなど、保健衛生分野における学術振興に努めています。また、医事衛生の研究及び振興に資するため、医師や職員による調査研究活動に力を入れています。

◇ 学会活動

①「日本食品微生物学会」への助成

「日本食品微生物学会」は、昭和55年11月に食品の安全や品質管理にかかわる微生物検査、研究を担当する各専門分野の方々により、研究の一層の発展を図るために設立された「食品衛生微生物研究会」が前身です。食品の微生物に関する学術研究の推進とその成果の普及、食品の安全および機能向上に寄与することを目的としています。



第32回日本食品微生物学会学術総会

当財団は、1989(平成元)年4月より学会事務局を担当し、学会の発展に大きく貢献しているとして、平成23年10月6日、日本食品微生物学会より功労賞を授与されました。



第32回日本食品微生物学会総会(平成23年10月6日(木)タワーホール船堀)では、当財団伊藤武理事が「食品衛生と危機管理 東日本大震災と福島第一原子力発電所事故から学ぶ」と題する特別講演を行いました。講演スライドは、当財団HPにて公開しています。

(TOP>公益事業>日本食品微生物学会)

②日本カンピロバクター研究会への支援

「日本カンピロバクター研究会」は、細菌性下痢症の最も主要な病原菌である本菌の研究・調査・感染症制御など様々な分野の検討を行い、国民の保健医療や食品衛生に貢献することを目的としています。

当財団は平成23年度から事務局を務め、学際的な研究の推進を支援しています。

平成23年12月3日(土)には、麻布大学生命・環境科学部新棟にて、「日本カンピロバクター研究会 第4回総会」を開催いたしました。



日本カンピロバクター研究会 第4回総会

◇ 医師や職員による調査研究

当財団および医療法人は、医事衛生の研究及び振興に資するため、医師や職員による調査研究活動を奨励しています。

平成23年度は健康に関するテーマで2題、食と環境に関するテーマで5題に対し、助成を行いました。

平成23年6月30日には、内部の職員に対し、平成22年度の調査研究成果の発表会を開催し、活発な質疑応答が交わされました。平成23年度の研究発表会は平成24年6月15日に行う予定です。



平成22年度 研究発表会

《平成23年度の研究内容》

①「子宮頸がん検診者におけるHPV感染者の把握とTypingの調査・研究」(3年計画の2年目)

代表者:石井保吉(医社)こころとからだの元氣プラザ 臨床検査部 部長

②「尿中ミオイノシトールの実用化に向けた応用研究」

代表者:山縣文夫 当財団理事

③「乳酸処理による鶏肉および『と体』のカンピロバクター除菌効果の検討」

代表者:和田真太郎 当財団 食と環境の科学センター 調査研究室 主任

④「食品微生物検査における損傷菌問題」

代表者:森 哲也 当財団 食と環境の科学センター 調査研究室 主任

⑤「食品中のトランス脂肪酸分析法の検討および含有実態調査」

代表者:水野竹美 当財団 食と環境の科学センター 食品理化学検査部 技術専門科長

⑥「檜原村民に安全でおいしい水を提供するための基礎調査」(3年計画の3年目)

代表者:箭内慎吾 当財団 食と環境の科学センター 営業第3G部長

共同研究者:岡部大達、山賀健治、川崎千珠子、渡邊政人、瀬戸博、清水隆浩、千代田守弘、川俣友、荒川恵子、渡辺勝男、馬場洋一、吉川百合、伊藤武

⑦「パッシブサンプラーを活用した総揮発性有機化合物(TVOC)測定法の開発」(3年計画の1年目)

代表者:瀬戸博 当財団 食と環境の科学センター 環境検査部 技術部長

※上記の研究報告は、当財団平成23年度事業年報にて掲載予定。

◇ 視察団を派遣 「牛肉の安全性確保に関する豪州視察」(詳しくは、本誌12ページ)

普及啓発

(メンタルヘルスセミナー)

働く人たちのこころの健康づくり

今やメンタルヘルス対策は、ほとんどの企業における大きな課題であり、東日本大震災後の厳しい経済情勢のなか、日本のメンタル問題はさらに難しい局面を迎えたといわれます。昭和60年より職域のメンタルセミナーを推進してきた当財団・医療法人は、120周年を機に、公益事業の新たな柱としてメンタルセミナー企画を立ち上げ、3年計画で実施を予定しています。

職域の現場で実効性のあるメンタルセミナーを立ち上げ、広く啓発しようと、外部委員を交えた企画委員会を組織し、運営しています。平成23年度は、パイロットセミナーで方向性を探り、平成24-25年度の本格実施への第一歩を踏み出しました。

■メンタルセミナー企画委員会

アドバイザー	森 晃爾(産業医科大学産業医実務研修センター長)
座長	及川孝光(元氣プラザ統括所長)
委員	白波瀬丈一郎(慶應義塾大学医学部精神神経学教室講師)
	吉川 徹(公益財団法人 労働科学研究所副所長)
	太田千代次(元氣プラザ常務理事)
	垣内博成(元氣プラザ産業保健部医師)
	坂本宣明(元氣プラザ産業保健部医師)
	松浦真澄(元氣プラザこころの健康相談室室長)
オブザーバー	山田洋輔(公益事業室担当理事、元氣プラザ副理事長)
	川上伸榮(産業保健部長)
事務局	三橋祥江、水戸純一、八木忍(公益事業室)

企画会議：平成23年4月、6月、8月、11月、平成24年1月(計5回)

■パイロットセミナー

◆「みんなで頑張れる」ためのメンタルヘルス～職場における新たな展開を模索する」

- ◎日時：平成23年10月14日(金)13:30～16:30
- ◎会場：主婦会館プラザエフ9階
- ◎対象：人事・労務管理、メンタルヘルス推進担当者、衛生管理者、医師、保健師・看護師等
- ◎参加数：86名
- ◎参加費：1,000円
- ◎総司会：及川孝光、森 晃爾
(パネルディスカッション共)

■基調講演：

「働きやすく、働きがいのある職場づくりの共通軸」 吉川 徹

■基調講演：

「職場復帰プロセスの標準化と可視化～故障者リスト入りした選手を鍛え育てるという視点」
白波瀬丈一郎

■指定発言①：松浦真澄

■指定発言②：岡田 賢

(当財団・医療法人人事部長)

■パネルディスカッション

◎パネリスト：

吉川 徹、白波瀬丈一郎、松浦真澄、岡田 賢

◎ゲストスピーカー：

山田洋輔 (元三菱ケミカルホールディングス副社長、元三菱化学専務)



病気解説から始まるメンタルセミナーが多いなか、『働くこと』を前提に、産業保健、精神科医、臨床心理士、企業の視点からとらえた点が新しく、参加者の満足度9割以上という高い評価につながりました(及川孝光 統括所長)。



森 晃爾アドバイザー

白波瀬丈一郎委員

パネルディスカッションでは、「メンタルヘルス問題は、経営者の質が問われる。また、働く人も、働くことの意味を問い直される時期を迎えた。働くとは何かという原点に返って考えるべき(山田洋輔副理事長)」という発言に会場全体から大きな共感が寄せられました。



産業保健が持つ、働く人をサポートする役割が、「復職において鍛え育てる視点」と「いい職場を作ろうという視点」から参加者に理解されたと、森晃爾アドバイザーは評価しています。



今後は、復職支援(平成24年度)、職場環境改善(平成25年度)をテーマに、2年連続で開催する予定です。

普及啓発 (健康セミナー)

働き盛りからの予防医療の普及開発

平成20年度から4年連続して『健康日本21※』に基づく健康セミナーシリーズを展開。「人生80年代」に健やかな老後を過ごすため、働きざかりから始める健康づくりを重点課題として、「健康寿命の延伸」や「生活の質の向上」に役立つ講演会を企画しています。今年度は「がん」「糖尿病」「循環器病」のテーマに焦点をあてました。

※21世紀における国民健康づくり運動

健康に関するセミナー

◎シリーズ「働きざかりから始める、人生80年代の健康づくり」全3回
(会場はすべて女性就業支援センター)

◆9月7日「あなたの腸は大丈夫？
大腸がんと過敏性腸症候群(IBS)
対策」 (参加者数:291名)

講師:日比紀文(慶應義塾大学医学部消化器
内科 教授)

司会:及川孝光(元氣プラザ統括所長)

後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡
協議会、日本栄養士会、東京都栄養士会



近年、わが国では直腸と結腸を合わせた「大腸がん」の罹患者数が増加しています。大腸がんは早期発見ができれば、ほぼ完治できますが、大腸内視鏡での検診率が低いこともあり、進行した状態で発見される傾向にあります。また、若年層においてはストレス等により過敏性腸症候群が増加傾向にあるなど、腸の健康について、トータルで考える必要があります。



消化器内科がご専門の慶應義塾大学医学部消化器内科教授 日比紀文先生に腸の代表的な疾患である「大腸がん」「過敏性腸症候群」について、原因や予防方法、検診の重要性などをわかりやすくご紹介いただきました。

◆11月2日「なぜ減らない!糖尿病
の実態と予防対策」 (参加者数:285名)

講師:岩本安彦(東京女子医科大学 常務理事
名誉教授)

司会:高築勝義(元氣プラザ名誉所長)

及川孝光(元氣プラザ統括所長)

後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡
協議会、日本栄養士会、東京都栄養士会、日本
成人病(生活習慣病)学会



現在、およそ国民の5人に1人は糖尿病もしくはその予備軍と言われています。糖尿病は自覚症状がないため、そのまま放置して症状が進行し、合併症を併発したり、人工透析が必要な状態になったりするなど、深刻な事態に陥る方も少なくありません。



糖尿病がご専門の東京女子医科大学常務理事・名誉教授の岩本安彦先生から糖尿病の予防や早期治療の重要性、進行を防ぐにはどうしたらよいか分かりやすくお話いただきました。

◆12月9日「働き世代の心臓病・
脳卒中対策!〜コレステロールと
どう付き合うか」(参加者数:302名)

講師:寺本民生(帝京大学医学部長・内科教授)

司会:高築勝義(元氣プラザ名誉所長)

及川孝光(元氣プラザ統括所長)

後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡
協議会、日本栄養士会、東京都栄養士会、日本
内科学会、日本動脈硬化学会、日本成人病(生
活習慣病)学会



厚生労働省の平成22年人口動態統計によると、日本人の死因のおおよそ4人に1人は、狭心症・心筋梗塞などを含めた心臓病と、脳出血・脳梗塞などの脳卒中となっています。これらの疾患を引き起こす動脈硬化の危険因子として、血中の悪玉コレステロールの増加や高血圧が挙げられます。心臓病や脳卒中で倒れると、幸い一命を取り留めても、仕事ができなくなったり寝たきりになったりすることも少なくありません。



高脂血症や動脈硬化がご専門の帝京大学医学部長・内科教授 寺本民生先生が、心臓病・脳卒中などの“血管疾患”を予防するにはどのような生活を送ればいいのか、コレステロール対策を中心にわかりやすくご紹介しました。

(全3回シリーズの講演内容を、講師の先生方のご理解・ご協力により、小冊子に編集しました⇒P13)

普及啓発 (食と環境のセミナー)

身近な食や環境の問題について

当財団では、企業の食品衛生担当者や環境衛生担当者対象のセミナーは、昭和51年より30年以上にわたって開催しており、最先端の食や環境の情報提供に努めています。平成23年は、牛肉の安全性確保に関する豪州視察で得た最新情報をいち早くセミナーでご紹介いたしました。

食と環境のセミナー

◆5月17日

第79回 食と環境のセミナー

(会場:日本橋教育会館 参加者数:152名)

「トランス脂肪酸に関する表示のあり方」

講師:森田 邦雄(社団法人全国はっ酵乳酸菌飲料協会 専務理事)

「トランス脂肪酸試験法について」

講師:水野 竹美(当財団 食品理化学検査部)

「HACCP システムの普及と企業に求められる食品の安全性確保」

講師:小久保 彌太郎(社団法人日本食品衛生協会 技術参与)



◆11月28日

第80回 食と環境のセミナー

(会場:月島社会教育会館 参加者数:102名)

「オーストラリアにおける牛肉の安全性確保について」

講師:森 哲也(当財団 調査研究室)

「放射性物質の食品への影響」

講師:林 清(独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所 所長)



■牛肉の安全性確保に関する豪州視察

期間:平成23年10月9日~15日

□視察団構成員

団長:当財団理事 伊藤 武

団員:東北大学大学院歯学部研究科 教授 小坂 健

当財団 微生物検査部 部長 林田 瑞穂

当財団 調査研究室 主任 森 哲也

後援:在日オーストラリア大使館、

豪州食肉家畜生産者事業団 (MLA)



昨今、腸管出血性大腸菌 O157、O111 などによる食中毒事件が発生し、牛肉の本菌汚染が指摘されています。また、生食用牛肉に関して、厳しい衛生対策(法規制)が求められ、生食用牛肝臓についても、喫食の禁止の方向で検討が進められています。

「牛海綿状脳症(BSE)発生のない国」と国際獣疫事務局(OIE)に認定された国、オーストラリアでは、腸管出血性大腸菌汚染率も低いとされています。



平成15年に第1回現地調査を行った当財団では、最新データ解析・公表の必要性から、豪州食肉家畜生産者事業団(MLA)の協力、在日オーストラリア大使館の理解と支援を得て、視察団を送ることとなりました。

公益法人として、現地専門官から最新情報を収集し、生産農場等の視察を行い、リスクアセスメントの結果を公表することで、食品関連事業者や消費者に対する衛生思想の啓発に努めたい考えです。

オーストラリアの肥育農場、輸送、家畜市場、食肉処理所では、進んだ品質保証制度、優れたトレーサビリティ、厳しい監査制度があり、この安全性確保の取り組みは、翌月11月28日(月)にさっそく食と環境のセミナーで紹介されました。



食肉処理場における始業前の行政による点検



特定危険部位の除去

豪州視察を終え、セミナー講師を務めた調査研究室の森哲也主任は、「牛肉産業、行政、学術の連携による腸管出血性大腸菌のリスク分析とデータに基づいた生産管理への落とし込みが見られ、効果的な汚染率低減を実感することができました。今般、日本においても生食用食肉(牛肉)の規格基準がリスク分析に基づいて定められましたが、今後も産学官連携のリスク分析が行われ、消費者の健康被害低減に還元されることを希望します」と話しています。

行程表:

10月9日(日)	成田発
10月10日(月)	シドニー経由ブリスベン着 オーストラリア検疫検査局(AQIS)、 オーストラリア連邦科学産業研究機構(CISRO)、 NATA認定検査所視察
10月11日(火)	(午前3時30分出発) JBSオーストラリア社農場視察
10月12日(水)	(午前3時30分出発) ティーズ・ブラザーズ社視察 ブリスベン発キャンベラ着 農水林業省(DAFF)、OzFood Net視察 キャンベラ発シドニー着
10月13日(木)	豪州食肉家畜生産者事業団(MLA)視察
10月14日(金)	O157リスク分析と意見交換 シドニー発
10月15日(土)	成田着

出版関連

幅広く健康・生活情報を提供

平成20年度よりセミナーの講演内容を小冊子にし、予防医療の普及・啓発に努めています。また、平成22年度からの「食品と環境」衛生講座シリーズでは、食品関連事業者にとって大きなリスクとなる、カビの発生防止に関する小冊子を発行しました。

働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり⑩～⑫

人生80年時代をキーワードに、大腸がんと過敏性腸症候群、糖尿病、心臓病と脳卒中をテーマに開催したセミナーをもとにハンディな冊子を発行しました。

大腸がんの早期発見・治療の大切さや腸の不調、自覚症状のない糖尿病の進行を防ぐ方法、心臓病や脳卒中の原因となる動脈硬化を予防するための生活習慣など、働き盛り世代の健康づくりに役立つ内容をご紹介しますシリーズです。



新刊 発行日:平成24年3月(㊤4月) サイズ:A5版 ページ:⑩36ページ ⑪33ページ ⑫38ページ 発行部数:各2,000部 頒価:各250円

- ⑩「あなたの腸は大丈夫? 大腸がんと過敏性腸症候群(IBS)対策」 日比 紀文(慶應義塾大学医学部消化器内科 教授)
- ⑪「なぜ減らない! 糖尿病の実態と予防対策」 岩本 彦彦(東京女子医科大学 常務理事 名誉教授)
- ⑫「働き世代の心臓病・脳卒中対策～コレステロールとどう付き合うか?」 寺本 民生(帝京大学医学部長・内科教授)

バックナンバー

セミナー会場での頒布や、ホームページを通して日本全国からお求めいただき、集合教育の副教材としても活用いただきました。人気のシリーズに成長しています。

働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり①～⑨

- ①「元気な高齢期は一日にしてならず」
- ②「男と女の更年期ケアとつきあい方」
- ③「睡眠障害とこころの病～事例と対策～」
- ④「働きざかりから始める歯周病対策 生活習慣病の黒幕～それは歯周病!」
- ⑤「働く人のストレス対策～うつを防ぐセルフケア～」
- ⑥「メタボ・うつと睡眠障害 予防と対処法」
- ⑦「働き世代の疲労対策 疲れのメカニズムとセルフケア」
- ⑧「静かに広がる、働き世代のアルコール問題! ～依存症にならないために」
- ⑨「ここまでわかった! 食生活改善とがん予防」

「食品と環境」衛生講座シリーズ

- ①「結婚式場におけるノロウイルス食中毒対策」
- ②「リスク管理としてのシックハウス対策」
- ③「食品微生物検査を知る～食品従事者の皆様へ」

※冊子の詳細はホームページでご確認ください(TOP>公益事業>出版物)

人気のシリーズに成長

小冊子の23年度販売部数は4,158部となり、前年度の1,663部を大きく上回りました。HPやチラシの積極活用、セミナー会場販売などに加え、新聞や雑誌の告知記事からも多数の注文を頂きました。衛生講座シリーズは、公的機関の講習会教材として400～500冊の大口注文を頂き、実用書として活用されています。

「食品と環境」衛生講座シリーズ④



「食品に発生するカビとその防止」

難波 豊彦(当財団 食品微生物検査部 部長)

温暖多湿な日本の気候は、まさしくカビに最も適した環境で、生活の至るところにカビが生きています。食品従事者のために、カビの基本的な知識と対策を写真とイラストで分かりやすく紹介する実用書です。

新刊 発行日:平成23年12月 サイズなど:A5版 28ページ 発行部数:2,000部 頒価:200円

【講演録】食のシンポジウム「食品表示を学んで、食生活に役立てよう!」

平成22年12月11日に開催した食のシンポジウム「食品表示を学んで、食生活に役立てよう!」の内容を講演録にいたしました。食品表示の正しい読み取り方とその最新情報をご紹介します分かりやすい内容です。

発行日:平成23年7月 サイズなど:A4版 50ページ 発行部数:1,000部 頒価:無料

新刊



【講演録】創立120周年記念シンポジウム「アルツハイマー型認知症の治療・予防戦略～研究・治療・ケアの最前線から」

(詳しくは本誌5ページ)

平成22年度事業年報

両法人の事業案内およびデータベースとして使用することを目的としています。本年度は付属のCD-ROMの袋を一新し、年報本体から落ちにくく、かつ出し入れし易くしました。



新刊

発行日:平成23年8月30日
サイズなど:A4版、188ページ
本編・データ編CD-ROM付属
発行部数:1,000部
配布先:契約先、関係行政機関、関係研究機関、関係団体など

公益事業については、下記を掲載しました。

〈平成22年度公益事業研究報告〉

- ①「子宮頸がん検診者におけるHPV感染者の把握とTypingの調査研究」
 - ②「尿中ミオイノシトールの実用化に向けた応用研究」
 - ③「パルスフィールドゲル電気泳動による衛生指標菌の疫学解析」
 - ④「楡原村民に安全でおいしい水を提供するための基礎調査」(2年目)
- 〈遠山椿吉賞受賞記念講演会 講演録〉

- ①「魚介類アレルギーの同定と分子生物学的性状の解明ならびに検査法開発に関する研究」 遠山椿吉賞受賞 塩見一雄
- ②「食と環境の難分解性環境汚染物質の長期モニタリング」 遠山椿吉賞特別賞受賞 小泉昭夫

※事業年報以外の出版物は 当財団ホームページよりご購入いただけます。

インターネット による 情報提供

食と環境、健康に関する情報発信とメールマガジンの運営・管理

東京顕微鏡院のホームページでは、食や環境衛生思想の普及啓発を目的として「トピックス」を掲載しています。23年度はトップページにアクセスボタンを作成し、一つの画面から見たい記事をすぐに閲覧できるようにしました。また、元氣プラザのホームページでは、暮らしに役立つ健康情報、身近な食の安全と生活環境衛生の知識の啓発を目的として、毎月一回メールマガジン「元氣プラザだより」を発行しています。

■メールマガジンによる普及啓発

メールマガジン「元氣プラザだより」は、本年度、「健康生活支援コラム」と題した以下の3種類のコラムを連載しました。

- ・「ドクターが教える、健診結果の読み方」
- ・「わかる!使える!元氣プラザのメンタルアドバイス」
- ・「自分でできる、食から見直す健康生活」

コラム「ドクターが教える、健診結果の読み方」では、放置してしまいがちな健診結果を、ドクターのアドバイスで健康維持に生かすという内容で、22年度から継続しています。23年度は主に消化器を取り上げ、読者層を拡げました。

「わかる!使える!元氣プラザのメンタルアドバイス」のコラムでは、カウンセラーによる働く人のメンタルヘルスや、誰でも簡単にできるリラックス法が関心を集め、外部団体から2件の転載希望があり、メンタル問題の関心の高さがうかがえました。管理栄養士が執筆するコラム、「自分で

できる、食から見直す健康生活」は、健康につながる食生活の紹介のほか、四季の旬な食材を使った健康レシピが読者の注目を集めました。



(元氣プラザHPより)

また、「知っておきたい、食と環境衛生のトピックス」では、食中毒や食物アレルギー対策、住居内化学物質の健康被害などを取り上げました。また、インフルエンザ対策を室内空気環境と医療の2つの側面からご紹介しました。



(東京顕微鏡院HPより)

発行数は、平成22年3月号の1,758名から、平成23年3月号の1,828名へと堅調に伸びています。平成24年度も、食と生活環境衛生のコラムの充実を図るなど、新たな読者層の開拓を目指しています。

■「遠山椿吉記念館」 当財団ホームページ内に開設

(詳しくは、本誌5ページ)

■広報活動による予防医療の普及啓発

○婦人科の病気安心ガイド2011(『すてきな奥さん』とじ込み付録)

婦人科健診の大切さを知っていただき、受診率を向上させるために、主婦と生活社の月刊『すてきな奥さん』と協力し、「婦人科の病気安心ガイド2011」を作成しました。11月号の付録として広く利用され、当法人も健診の普及促進として、6,600部を配布しました。

内容は、①子宮・卵巣の病気サイン②おっぱいの病気サイン③婦人健診レポート④女性の体Q&Aの4部構成で、婦人科健診医長の永田順子先生と乳腺外科の神戸雅子先生による解説を中心に、婦人科健診の内容紹介として、当法人施設の詳細レポートも掲載されました。



婦人科の病気安心ガイド2011

※ここらからの元氣プラザのホームページよりダウンロードいただけます。

○はじめての婦人科健診セミナー ～健診デビューで知っておきたいこと～

- ◎参加者：首都圏在住の女性(参加者数：21名)
- ◎日時：平成24年3月14日(水) 18:30～20:00
- ◎会場：ここらからの元氣プラザ 1階会議室、6階検査室



3月の女性の健康週間を機会に、婦人科健診の大切さを知って、より多くの方に婦人科健診を受診いただくために、子宮がん検診の講演会と、検診室の内部や検査機器を見学する体験型のセミナーを開催しました。

婦人科の永田順子先生は「健診結果の生かし方と、子宮頸がん予防について」、東京都細胞検査士会会長でもある当法人の石井保吉部長は「細胞検査でわかること」を講演しました。

また、希望者17名の方には、検査が痛いと思われがちなデジタル乳房撮影装置(マンモグラフィ)に、実際に手を置いて圧迫の強さを確認したり、内診室の内部を見学いただき、好評価をいただきました。



マンモグラフィ検査を手で体験!

地域貢献

次世代を担う子どもたちへ

平成18年より日本橋研究所近隣の小学校5・6年生を対象に「夏休み子ども研究者体験」セミナーを毎年実施し、6年目を迎えました。子どもたちにサイエンスを学ぶ楽しさや、食品の安全性や健康に関心を持つきっかけになることを願っています。また、平成19年より千代田区立九段中等教育学校の課題解決学習に協力し、次世代を担う子どもたちを対象とした衛生思想の普及啓発に努めています。

■平成23年度「夏休み子ども研究者体験」セミナー

白衣を着て、身についた菌や食べ物に含まれる色を観察しよう！

～試してみよう！色の变化でわかる検査～

■A日程：7月28日(木)～29日(金) ■B日程：8月4日(木)～5日(金) ◎参加者数：32名

◎講師・協力：公益委員、調査研究室、食品微生物検査部、食品理化学検査部

◎後援：中央区教育委員会 ◎参加校：有馬小学校、日本橋小学校、久松小学校、城東小学校、泰明小学校、中央小学校、明石小学校、京橋築地小学校、明正小学校、常盤小学校、佃島小学校、月島第一小学校、月島第二小学校、月島第三小学校、豊海小学校（15校）



東京新聞 首都圏情報誌「暮らすめいと」(11月号)

6 回目を迎えた今年度は、中央区15校から47名の参加申込みがありました。自分の手についている菌を採取して、24時間培養後の変化までを学ぶので、検査体験は2日間の日程で実施しています。

検査体験のテーマは、「色」。身近にある食品の色について考えてもらおうと、カラフルなチョコレートから着色料の「色」の成分を取り出す実験を行いました。いくつかの色素がミックスされた色や、単色の色素など、ペーパークロマトグラフィーを使って確認しました。

紫キャベツやターメリックから「色」を取り出し、自分たちの手でリトマス試験紙を作成して、酸性とアルカリ性について学びました。

また、中央区の校長先生方からのご要望をもとに、学習した検査を実際に行う検査現場の見学も取り入れています。研修室では騒がしかった参加者も、緊張感のある検査室の中では、真剣な表情で



グラム染色も体験

検査説明に耳を傾けていました。

参加者の感想には、「学校ではできない実験ができて、とても良かったです。目に見えない手のばいきんを見ることが出来て、よく手を洗うことが大事だということが学習できました」など、学校の中では学べない検査の体験の中から、衛生に関する気づきもあったようです。

また、保護者の方からは、「中学校に入ったら、このような実験をたくさん行いたいと申しております。我が家には、現在小学3年生の娘もおりますので、何年か後に参加させたいと思います」という声もいただきました。

本年度は、地域貢献の取組みとして、東京新聞「暮らすめいと」紙面でも紹介されました。



塩見幸博統括所長(中央)より修了証を授与

■地元中学生の校外学習に協力

11月25日(金)、九段中等教育学校総合学習「都市と環境」の一環として、4名の1年生が元氣プラザを訪問し、各階を見学しました。今年の課題は「定期健診を受ける大切さを伝え、理解してもらい、定期健診を多くの人が受けてもらえるシステムを考える」。



榛澤担当部長より課題の説明元氣プラザで発表

期健診を多くの人が受けてもらえるシステムを考える」。榛澤英明担当部長(臨床検査部)の出題です。



生徒たちは学内に戻って調査し、60%にも上る健診未受診者を減らす対策を検討。平成24年1月25日(水)、提案として短時間の検査やティッシュの配布およびポスター制作などで健診のメリットをアピールする方法を発表しました。

■山形県立高校の16名が施設見学



11月15日(火)、山形県立米沢興譲館高等学校の2年生15名が教師の引率で日本橋施設を訪問し、半日にわたって研修・施設見学を行いました。同校は平成14年度より生徒の進路意識の向上を目的として、大学や官公庁、企業、研究施設などの見学会を実施しており、今回はネット検索で当財団の事業に関心を持ったということです。

食品理化学・食品微生物の検査業務の施設見学では、顕微鏡で実際の検査を体験するなど、現場ならではの雰囲気を感じ取っていました。

組織の活性化

両法人共同の社会への貢献、全職員のスピリットの抛り所に

両法人共同の社会への貢献、全職員のスピリットの抛り所に公益事業は当財団の基幹事業であり、財団をルーツとする当医療法人の精神基盤としても重要です。創業の精神に則り、人びとの健康と公衆衛生の向上に先駆的な役割を果たす、というミッションの実現に向けて歩み続けています。

■公益委員

私たちの公益事業は、両法人合同の月例公益会議で討議され、透明性をもって運営されています。

平成23年度は、委員が会議に参加し、セミナー等を運営するだけでなく、希望するワーキンググループに所属し、公益事業室スタッフと共同でニュースレターや体験型セミナーの企画・運営を行いました。

組織活性化を目指して、毎年度末に公益委員のヒアリングを実施し、継続的に、運営方法の改善につなげています。部門横断的なコミュニケーションを通して風通しの良い企業風土を醸成し、組織活性化に生かせるよう努めています。

平成23年度公益委員は、各事業部門から11名の皆さんが理事長通達により任命されました。(五十音順)

◎東京顕微鏡院：金子旬一(経営管理部)、川崎千珠子(環境衛生営業部)、小林恵美(衛生検査管理部)、平賀真基(事務統括部)、森哲也(調査研究室)

◎こころとからだの元氣プラザ：赤塚裕子(婦人健診課)、草薙貴子(営業管理課)、高橋志津江(看護部・婦人健診)、馬場敏江(情報処理部)、宮崎好美(産業保健部)、湯田 亮(放射線科)

■ワーキンググループ活動

○次世代を担う子どもたちへの衛生教育

子どもを対象とした体験型セミナーを、公益委員と共に開催しました。

●夏休み子ども研究者体験セミナー(詳しくは、本誌15ページ) ●元氣プラザ親子セミナー(詳しくは、本誌17ページ)

○公益ニュースレター「Leap」

公益事業活動のニュースほか、公益委員の連載企画を通して、創業精神・公益スピリットの顕在化と一体感の醸成に努めています。

◆タイトル：「皆の仕事の経営を結ぶ～縁の下のプロフェッショナル・管理部経営管理」「努力と工夫で年間25,000人を検査～業界トップレベルを保つ放射線科の取組みに密着」「室内空気環境検査を知ってみよう～快適な学校環境・職場・住宅環境づくりに」「放射性物質検査について知ってみよう～原発事故による放射能漏洩問題に対応するために」



発行：2011年夏、2012年冬 サイズなど：A4版 16ページ
発行部数：各1,500部

■120周年記念シンポジウム

トップダウンと職員参加型の融合をめざし、公益会議は、120周年記念事業委員会(委員長：山田洋輔)の下に位置して、その他の小委員会と同様に活動しました。テーマ等は月例本委員会・経営会議でも検討し、記念事業の実現に向けて全社的な体制で進めました。(詳しくは、本誌5ページ)

※120周年記念事業について：平成23年3月11日の東日本大震災による諸般の事情を鑑み、記念式典及び祝賀会、職員イベント、顧客イベントは中止することとしました。120周年告知および記念シンポジウムは実施し、「夢」プロジェクトは休止し、記念誌は活動を継続しています。



セミナー会場受付



遠山椿吉賞
授賞式受付

「Our Credo」公益会議メンバーの共通認識を文章化し、これを抛り所とした活動を積み重ねています。



私たちの公益事業

1. 創業精神に則り、人びとの健康と、食品の安全、生活環境衛生向上のため、両法人の事業を基盤に、世の中に貢献します。
2. 時代の先を見つめ、先駆的な視点から発信することに努めます。
3. 職員が参画意識を持てる仕組みを作り、組織の活性化に生かします。

運営方針

多くの人の知恵を集めるとともに、公益会議における意見交換を通して、より良い公益事業の実現に努めます。

公益委員は、自らの仕事で得た知見から、公益会議で意見を述べ、セミナー運営や、ワーキングプロジェクトに参加し、職場と公益事業活動の橋渡しに努めます。

公益事業室スタッフは、公益事業を企画し、公益会議で説明し、公益委員との議論を通して公益会議で得た意見を、より良い公益事業の創造と運営に生かします。

公益委員

- ・自分の日々の仕事をこなすだけでなく、その仕事のなかにある「公益性」を考えます。
- ・自分の仕事と「公益性」の関連から、公益事業を構想し、その公益事業の実現に努め、社会に貢献します。
- ・この考えを周囲に、波及させていきます。



「すべての人びとのいのちと環境のために」
For Life and Environment of All People.

制定：March 2010

組織の活性化

両法人共同の社会への貢献、全職員のスピリットの抛り所に

両法人共同の社会への貢献、全職員のスピリットの抛り所に公益事業は当財団の基幹事業であり、財団をルーツとする当医療法人の精神基盤としても重要です。創業の精神に則り、人びとの健康と公衆衛生の向上に先駆的な役割を果たす、というミッションの実現に向けて歩み続けています。

■社内オープンセミナー

◆4月20日「認知症とは何か」

(会場:ベルサール飯田橋 参加者数:70名)

講師:松下正明(東京都健康長寿医療センター 理事長、東京大学名誉教授)



「認知症」は、超高齢社会を迎えた日本にとって最重要課題の一つであるだけでなく、誰でもかかる可能性のある身近で深刻な問題です。公益委員の関心も高く、認知症の知識を学びたいという声の高まりを受け、社内セミナーを開催しました。



講師には、認知症研究の指導的立場にあり、10月1日の当法人創立120周年記念シンポジウム「アルツ

ハイマー型認知症の治療・予防戦略—研究・医療・ケア最前線から」の司会・コーディネーターでもある松下正明先生を迎えました。

「認知症の人が穏やかに暮らしていくためには、周囲が患者やその家族の支えとなり、いかに患者の『尊厳ある暮らし』を守ってあげるかが大切」という松下先生のお話には、「予備知識として大変わかりやすかった」、「家族に認知症患者がいるが、進行の度合いの参考になった」、「10月の記念シンポジウムでもっと詳細を聴きたい」など、多数の感想が寄せられました。

■公益事業レポート2010

公益事業の年次ディスクロージャー誌として発刊しました。ステークホルダーの皆様に対して、当財団・医療法人の公益事業の情報開示に役立てられています。



発行日:平成23年5月18日
サイズなど:A4判 20ページ
発行部数:3,000部

●平成23年度夏休み「元氣プラザ 親子セミナー」

白衣を着て検査技師を体験しよう! ~パプリカ君とみかんちゃんの健康診断~

- ◎日程:7月30日(土) ◎参加者数:15名 ◎参加者:当財団・医療法人で働く関係者・親子
- ◎講師・協力:及川孝光統括所長、公益委員、検査部、臨床検査部、看護部、健康支援部、診療部
- ◎教材開発:公益委員、公益事業室スタッフ

両法人で働く方々を対象に、親子で健康について考える機会を持つと始めたこの企画が、3回目を迎えました。今年度は、血圧・心拍数の解説を新たに及川統括所長が担当し、更にステップアップした企画となりました。

小学生になったら参加しようと心待ちにしていた1年生4人を含め、子ども7名、両法人から保護者8名が参加し、健康づくりの大切さについて体験学習をしました。

当日の講師は、及川統括所長のほか、元氣プラザの検査・指導に関する現場を担当している皆さん。「職場見学」と「検査技師」を楽しみながら体験できる元氣プラザのオリジナルテキストを使って、からだの中を検査するいろいろな機器の特長を学習しました。



及川統括所長による血圧・心拍数のお話



超音波検査(上の画面)とX線フィルム(下の画面)



血圧測定

魚の口からバリウムを入れてX線検査をしたり、X線検査と超音波検査の画像の違いを比較しました。

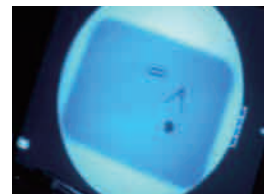
特に今年は、超音波検査装置を広いスペースに移動し、X線のフィルムも掲示して、同じゼリー検体の見え方の違いを比較できるように工夫しました。X線検査では映らなかった検体ゼリーの中の「さくらんぼ」が、超音波検査で映し出されると、歓声が上がりました。



食事と運動指導



口の中の細胞を検査





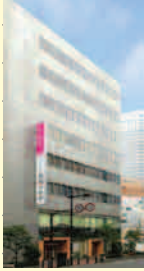


X線検査で見る特製の検体

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの歴史と公益事業

～3つの世紀にわたる歩み

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き	【戦前】	普及啓発活動、出版、その他公益事業 など	
	1800年～		
遠山椿吉、佐藤保、川上元治郎が協同して、京橋区にあった成医会の一室を借り、「東京顕微鏡検査所」を創立。検査業務開始	1891(明治24)年	 <p>「顕微鏡」第1号 (1894～1944年) ※後に「東京顕微鏡学会雑誌」に改称し、1944(昭和19)年戦時統制令で休刊するまで50年間発行</p>	
病原的徴菌標本の頒布を開始し、本所考案の喀痰沈殿器を製造販売	1892(明治25)年		
細菌検査の実務指導を行う講習科を開講	1894(明治27)年		機関誌「顕微鏡」第1号発行 啓蒙用幻灯映画製作
名称を東京顕微鏡院と改称	1895(明治28)年		「顕微鏡の祖」マルピギー200年記念式典、本院にて挙行
種痘術講習科を新設。培養基の発売開始	1896(明治29)年		コレラ講習会を開催 回帰熱講習会を開催
飲料水の検査を開始	1899(明治32)年		ベスト講習会を開催
母乳検査を開始			
事業拡大にともない、神田区小川町に移転			
	1900年～		
遠山椿吉院長、初代東京市衛生試験所長に任ぜられる	1903(明治36)年	 <p>来日したコッホ博士を囲む生花の会(於帝国ホテル) 前列左からロベルト・コッホ博士、北里柴三郎博士、後列左から2人目が遠山椿吉</p>	
ベスト試験室を新設	1907(明治40)年		
遠山椿吉院長、医学博士の学位を授与される			
保健部を新設。広く世間の人びとに対し、健康診査(健康診断)と衛生上の協議(衛生相談)を開始	1908(明治41)年	遠山椿吉院長、来日したロベルト・コッホ博士、北里柴三郎博士を招待し、生花の会を開催	
遠山椿吉院長、東京市参事会より独ベルリン市開催万国衛生および民勢学会参列、欧州各都市衛生設備実況調査を命ぜられる	1914(大正3)年	「結核予防善悪鑑」発行、「結核征伐の歌」を発表	
同時に、内務省より欧米都市における汚物掃除の実況調査を嘱託(翌年帰国)	1915(大正4)年		
遠山椿吉院長、内閣より医術開業試験委員を命ぜられる	1921(大正10)年	創立30年を記念して、『遠山博士脚氣病原因之研究』発行	
(院長、長年来の研究による)脚氣治療薬うりひんを製品化	1923(大正12)年		
9月1日関東大震災により、院舎およびその設備をすべて焼失。9月6日麻布区富士見町に仮院舎を建設し、			
10月1日一般業務を再開	1927(昭和2)年		
内務大臣より財団法人の設立許可を受ける	1928(昭和3)年		
遠山椿吉、肺がんのため遠逝享年71	1929(昭和4)年	脚氣の無料診療を開始	
レントゲン深部治療開始	1930(昭和5)年	第1回脚氣無料巡回診療実施(財団法人東京顕微鏡院社会部)	
震災により、以後10年にわたり事業中断	1935(昭和10)年	結核予防週間および健康週間に参加し、無料喀痰検査などを実施	
	1945(昭和20)年		
	【戦後】		
遠山正路院長より事業を継承	1954(昭和29)年		
診療所を開設、細菌検査所を再開	1955(昭和30)年		
職域を対象とした健康診断業務を開始。外来診療開始	1967(昭和42)年		
臨床検査は病院からの受託のほか、学校保健法による集団検査を拡大	1972(昭和47)年		
東京都の委託を受け、小中学生の大気汚染の影響調査を実施(5年継続)	1974(昭和49)年		
建替えによる新院舎完成。人間ドック事業を開始。付属臨床検査所を登録	1975(昭和50)年		
食品衛生法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受け、食品衛生検査所を開設	1976(昭和51)年		
がん検診(胃、子宮、乳房)開始。多摩分室を立川に開設	1978(昭和53)年		
		 <p>「小笠原健康な村づくり事業」(1978年～)</p>	
		離島村民の健康管理を目的とした「小笠原健康な村づくり事業」を開始 「小児ぜん息母親教室」、食品衛生セミナーなどを開催	

歴代代表者	(在任期間)	歴代代表者	(在任期間)
創立者(院長)	遠山 椿吉 1891~1928年	第5代(理事長)	山田 匡蔵 1967~1989年
第2代(院長)	遠山 正路 1929~1954年	第6代(理事長)	山田 和江 1989~1995年
第3代(院長)	細谷 省吾 1955~1957年	第7代(理事長)	下村 満子 1995~2007年
第4代(院長)	高橋 悌三 1957~1967年	現理事長	山田 匡通 2007年~

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き		普及啓発活動、出版、その他公益事業 など
水道法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受ける(簡易専用水道検査)	1979(昭和54)年	
立川衛生検査センターを開設	1986(昭和61)年	再興30周年記念シンポジウム「21世紀のいのちと生活」を開催
付属第2臨床検査所を登録	1987(昭和62)年	学術普及誌「健康と環境」創刊(~2000年)
 簡易専用水道検査 (1979年~)	1991(平成3)年	創立100周年記念シンポジウム「21世紀への生命潮流」を開催
	1992(平成4)年	シンポジウム「ハイブリッジフォーラム'92 ー21世紀への対がん戦略」を開催
		平成4年度より事業年報の発行開始
		 ハイブリッジフォーラム'92 21世紀への対がん戦略
食品検査施設を移転し、日本橋研究所を開設 (2001、2002、2005年に順次拡大)	1996(平成8)年	
立川事務所を開設、食品等分析調査研究所を合併 (1998年、食と環境の科学センター検査第3部に改組)	1997(平成9)年	シンポジウム「新時代の高血圧管理」職場と住宅環境を考えるなどを開催
会員制人間ドックを開始	1998(平成10)年	シンポジウム「新しい時代の糖尿病対策」 「はたらく女性とメンタルヘルス」などを開催
	2000年~	
食と環境の科学センター日本橋研究所に検査第3部を移転し、拡大 トータルヘルスセンターBe-Well!、 女性のための生涯医療センターViViを開設	2001(平成13)年	創立110周年記念日米メディカルシンポジウム 「21世紀の女性と性(ジェンダー)と健康」を開催
 こころとからだの元氣プラザ (2003年~)	2002(平成14)年	創立110周年記念シンポジウム「食の安全と健康を考える」を開催
	2003(平成15)年	女性のための生涯医療センターViVi 開設1周年記念シンポジウム 「アダムとイブの医療革命」を開催
	2005(平成17)年	東京顕微鏡院創立115年、こころとからだの元氣プラザ創立3年 記念シンポジウム「いのちとは何か、生きるとは何か」を開催
	2007(平成19)年	メディカル・シンポジウム「医療の未来、日本の未来 ーなぜ日本では高度先端医療が遅れているのか?」を開催
立川研究所を一ヶ所に統合拡大 こころとからだの元氣プラザ(飯田橋)と市ヶ谷本院の施設再配置 こころとからだの元氣プラザ(飯田橋)外来診療と 女性のための生涯医療センターViViを統合	2008(平成20)年	遠山椿吉生誕150年、没後80年を記念して遠山椿吉賞創設
	2009(平成21)年	「遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞」を西尾治氏、 同奨励賞を川崎晋氏に授与 遠山椿吉生誕150周年記念シンポジウム「東京の水の源流を探る ~豊かな東京の水利用を支える日本の水、世界の水~」を開催
こころとからだの元氣プラザ、アジュール竹芝総合健診センターの運営を受託 臨床検査部がこころとからだの元氣プラザの組織に移行 三菱化学メディエンスと共同運営で「元氣プラザ臨床検査センター」をスタート	2010(平成22)年	「遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞」を鈴木隆雄氏、 同特別賞を中村雅一氏に授与
3月11日 東日本大震災により、 創立120周年記念式典・祝賀会、創立120周年記念顧客イベント中止 4月1日 創立120周年	2011(平成23)年	「遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞」を塩見一雄氏、 同特別賞を小泉昭夫氏に授与 創立120周年記念シンポジウム「アルツハイマー型認知症の治療・ 予防戦略ー研究・治療・ケアの最前線から」を開催
創立120周年記念年頭式 豊海センタービル竣工 日本橋研究所が施設拡充に伴い、豊海研究所に移転	2012(平成24)年	「遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞」を白木正孝氏、 同特別記念賞を久山町研究グループ 代表 清原 裕氏に授与
		 遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞 (右:白木正孝氏 左:久山町研究グループ 代表 清原 裕氏)
		 豊海研究所(2012年~)

Our Credo 私たちの公益事業

1. 創業精神に則り、人びとの健康と、食品の安全、生活環境衛生向上のため、両法人の事業を基盤に、世の中に貢献します。
2. 時代の先を見つめ、先駆的な視点から発信することに努めます。
3. 職員が参画意識を持てる仕組みを作り、組織の活性化に生かします。



発行:

財団法人東京顕微鏡院 公益事業室

〒102-8288 東京都千代田区九段南4-8-32 TEL.03-5210-6651 www.kenko-kenbi.or.jp/

医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 広報室

〒102-8508 東京都千代田区飯田橋3-6-5 TEL.03-5210-6897 www.genkiplaza.or.jp/

問合せ先: 三橋 祥江 制作: 水戸 純一、田中 栄治、八木 忍、飯島 敏樹 デザイン: 金沢 謙児

2012.5.21 発行